

## 河北潟に残っている自然を調べてみませんか？



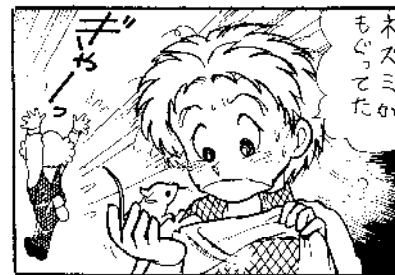
アサザの浮かぶ水路：水田の間をとる土堀の水路の約20mの間にアサザが群生している。

河北潟周辺では農地の水路の改修が進み、昔の面影はほとんどなくなっています。最近まで、河北潟周辺の小規模な水路では、メダカが泳ぐ姿をどこでもみることができ、多様な水草が生育していました。コンクリート製の水路に置き換わるところが多くなり、メダカの姿も良く探さないと見つからなくなりました。水草のうち、沈水性の種は、外来種のコカナダモなどを除くとほとんど確認できなくなりました。また、葉を水面に浮かべるアサザやトチカガミなども、わずか数カ所ですしか生育していません。昔ながらの水路は、いま河北潟周辺で最も失われつつある環境のひとつです。

河北潟の昔ながらの風景がどれだけ残っているのか？河北潟湖沼研究所生物委員会では、少しずつですが調査を始めています。まずは水路に注目して、その形態（最近改修されているか、護岸はされているか）や水質、生息する生物についてのデータを集めています。福久町にある写真の水路は、情報提供をいただいて出かけた場所です。素堀の水路で比較的安定したアサザの群落が確認されました。私たちが確認した4か所目の安定した群落です。まだまだ十分には調査が進んでいません。みなさんも一緒にこの活動に参加しませんか？興味のある方は金沢事務局（4ページを参照）までご連絡ください。

カコちんショウくん ねずみ ちんごう  
かほくがたチルドレン おかのひろみ

身近な動物、ネズミの仲間



す。ネズミが掘って作ったトンネルです。また草や根っこをかじった食べ痕も見つかります。雪があるときには小さな足跡が鮮明に残り、走り回った場所を知ることができます。

干拓地の農地では大根やキャベツ、大豆などの野菜や果樹、麦、牧草がつくられています。ネズミにとってごちそうになるものも多いようです。河北潟干拓地では営農が始まった間もない頃からネズミによる食害が深刻な問題となってきました。干拓地という新しい環境ができ、ネズミはすぐに進出してきたようです。ネズミがいることでネズミを主食とするチュウヒやノスリといった猛禽類も数多くみられます。全国的に市街地が増える中、平野部の自然環境は急速に失われています。ネズミが数多く生息している河北潟は豊かな自然観環境が残されているといえるのではないのでしょうか。

広大な農地と湖をもつ河北潟。平野部にひろがる自然環境ではたくさんの生きものが生活しています。

今回は、河北潟にひろく生息しているネズミについて紹介させていただきます。ネズミは山林や農地、河川敷とさまざまな環境に生息し、また人家や物置小屋などでもみられるとても身近な動物です。

河北潟ではこれまでにドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ、ハタネズミ、アカネズミが確認されています。

ネズミというと、細長くて頑丈な切歯、とがった鼻先、小さな体に長い尾っぽ、などと、からだ形がすぐに思い浮かんできます。ネズミの仲間は種類が多いですが、みんなよく似ています。

飲食店など調理場にでてきたり、天井裏をドタバタと走るなどで馴染み深いネズミがドブネズミやクマネズミ、ハツカネズミ。この3種類は家ネズミと呼ばれ、建物内や排水溝などをおもな生息場所としているようです。ハタネズミは、河川敷や田畑などひらけた草地の環境を好み、野草や農作物を餌としています。アカネズミは森林にすむ代表的なネズミです。果実や種子、やわらかい茎や根っこ、農作物や昆虫などバラエティーに富んだ食性をしています。

ネズミはすばしっこく、警戒心も強いようであまり見ることがありません。でもネズミがいるところには痕跡が残されています。干拓地では畑や畦、土手の地面に3-5cmくらいの円い穴があいているのをよく見かけます。指を入れてさぐってみると、穴は奥へと続いているのがわかります。

## 農家支援と干拓地農業の活性化を軸にして、野生生物や自然環境との調和を

河北潟湖沼研究所理事 高橋 久

石川県議会2月定例会本会議では、河北潟干拓地における農業の現状や新しい干拓地の利用について、県知事と農林部長から答弁がありました。河北潟干拓地を将来有効に利用するうえで、さまざまな議論が起こることが望めます。そこで、既にホームページ「チュウウヒのふるさと河北潟」に掲載した記事ではありますが、今後の議論の導火線となることを期待して一部修正し掲載します。

県議会で河北潟干拓地の将来の利用形態について取り上げられた背景には、莫大な未償還金問題や農業を取り巻く厳しい状況、河北潟干拓地特有の畑地の水はけの悪さや鳥獣害など、干拓地と農家を取り巻く諸問題がいよいよ厳しい状況になっていることがあると思います。たしかに今、河北潟の農家の方からは、あまり良い話を聞きません。干拓地の農地を手放したいと考えている農家もいます。このままでは未償還金がさらに増大していくと思われる状況もあります。従来的な畑作と酪農を軸にした農業支援策では、問題の解決が難しい状況があると思います。

こうした背景から、干拓地農家の新しい支援とともに、干拓地の新しい利用形態が検討されることは当然のこととも思われます。河北潟干拓地の活性化のために、従来の農業利用だけでなく新しい方向性が検討されることは、積極的な意義があるとおもわれます。

しかし一方で、現在干拓地において小麦や大豆を精力的につくり、まだまだ農地を拡大したいとがんばっている若い農家や、新しい入植者がいます。また独自に直売を精力的に進めている農家の方もいます。償還金問題など深刻な状況は変わりませんが、少しずつ希望を導き出そうとする農家の方々の姿が目につくようになりました。こうした農家の方々

の努力が報われる形での新しい施策が望めます。今回の議会では、交流センターの建設やグリーンツーリズムの振興といったことが提起されていますが、こうした施策が成功に導かれるためには、その舞台となる干拓地において農家が生き生きと農業をおこなっていることが前提です。

河北潟の自然は原生の自然環境ではなく、あくまでも人間の活動によって形成された二次的自然です。昨年の子どものカレンダーには4月の菜の花畑、6月の黄金色の小麦畑や7月のヒマワリ畑など、農業活動を通じてつくられた美しい河北潟の風景を掲載しています。自然の植生ではありませんが、幹線道路沿いに植えられたコスモスなどは河北潟の美しい風景のひとつです。これらは生産活動と結びついたものです。干拓地での生産活動が停滞することにより、荒れ果てた農地や捨てられたゴミの山など、グリーンツーリズムとは相反する環境を作り出す可能性もあります。

県が取り組む施策は、農家支援と干拓地農業の活性化を軸にして、さらに、野生生物や自然環境との調和といったことを達成して進められるものとなることを期待します。体験農園が、ただ都市住民の箱庭として完結するものではなく、その周辺の広大な農地を耕す周辺農家との何らかの関係をつくる場となれば、もっとすばらしいものになると思います。直売といった売買を通じた農家と消費者の結びつきをさらに強めることは重要ですが、それに留まらず、農家と消費者が直接的に触れあえる機会を設定すること、たとえば、「援農」のようなかたちで市民が農家を支援する制度への補助や、ファームステイ（農業留学）のための宿泊場所の提供など、農家

がホストとなるグリーンツーリズムへの援助などはできないのでしょうか？

こうした、生産者と消費者が目に見える形でつながる取り組みは、生産者の活力を増進するとともに、農業後継者の確保につながるかも知れません。さらに市民にとっては、こうした農業体験が野鳥観察会などの自然体験と結びつけば、精神的に充実した生活をおくるための重要な場所として、河北潟が位置づけられるかも知れません。

河北潟は金沢という大消費地からわずか1時間足らずのところにあるという地の利をもっています。最近よくインターネットにより生産者と消費者を結びつける試みがおこなわれていますが、河北潟においては、こうした媒体を通さなくても、直接の交流が可能です。さまざまな夢と可能性を秘めた土地が河北潟だと思います。

今後さまざまな議論が起こるなかで、具体的にすばらしい将来像が提案され、さらに実現されることを期待しています。

## お知らせ

### 『河北潟の自然と文化』編纂事業について

当研究所研究会会長の大串龍一金沢大学名誉教授を中心として、河北潟の地域の歴史と現状についての記録を作る事業が提起されています(詳しくは『河北潟総合研究』第5巻参照)。この事業は、河北潟の自然や歴史についての詳細な資料を集大成することと、それを総括的でわかりやすい冊子にまとめることの2つの目的から成ります。また資料の収集には、現在既に報告されている記録だけでなく、新たに調査をおこない新しいデータを収集する作業も含まれています。掲げている目標は大きなものですが、一歩ずつ進めるために近々ワーキンググループを立ち上げる予定です。この事業に興味がある方、ご協力いただける方は金沢事務局までお知らせ下さい。

### 「鳥たちの河北潟」カレンダー売上黒字

2002年カレンダー「鳥たちの河北潟」は558冊を販売することができました。多くの人たちの手に渡ることができ、とても嬉しく思います。ご協力ありがとうございました。

来年度のカレンダーは河北潟の植物がテーマとなる予定です。発行にむけて植物専門家の白井伸和さんが河北潟で数少なくなった植物の写真を撮影されています。かつて豊富にあった河北潟を代表する植物をご覧になっていただきたいと思います。どうぞお楽しみください。

### < 編集後記 >

いまの水辺環境はコンクリートで覆われたところばかり。殺風景で、黒い水の中へ滑り落ちそうな近寄ることができない場所。そんなところが多いですが、水の中にいる生きものが間近にたくさん見れる環境もあります。河北潟近辺ではわずかですが土堀の水路もみられます。そのひとつに近年希少な種となったアサザという水生植物が繁茂している水路があります。

その水路は幅が広く、水深はとても浅い状態で保たれています。数十年昔の河北潟の写真であるような舟が行き来していた水路はこのような感じであったのではと思います。

アサザは河北潟の近辺ではもうほとんどみることができません。初夏に水面に黄色いかわいらしい花を浮かべます。(K.N.)



アサザが群生している水路

「かほくがた」通信 VOL.7 NO.4

2002年3月30日発行

発行所 河北潟湖沼研究所友の会

〒920-0051 金沢市二口町八58

河北潟湖沼研究所金沢事務局内

TEL:076-261-6951 FAX:076-265-3435